

開催地名：鳥取県境港市	
開催日時	令和2年2月9日（日） 14：00～16：00
開催場所	境港市役所 保健相談センター講堂
語り部	仲條 富夫 （千葉県旭市）
参加者	自治会、自主防災組織、防災士、市職員等 約120名
開催経緯	近年当市では災害が発生していないこともあり、防災訓練や講演会等行っても参加者は高齢者がほとんどであり、さらに決まった人しか参加しないことから、住民の災害に対する危機意識の低下が懸念されている。今回、実際に津波に遭遇した語り部の講演を聞くことで、災害に対する備えの大切さについて認識してほしい。
内容	<p>（1）東日本大震災の当日</p> <p>自宅は防波堤から50メートルくらいの所に建っているため、東日本大震災発生直後は津波が心配であった。すぐに2階から海を見たが、特別な変化はなかった。その後大津波警報が発令され、ほとんどの住民が避難所に避難したが、自宅には寝たきりの母親がいるため、避難を躊躇していた。そこに第一波が堤防を越えて自宅前まで来た。その1時間後に来た第二波は堤防を越えなかったため、自宅に貴重品や着替えなどを取りに行く人がいた。私も一人暮らしの家を見回りに自転車で出かけたところ、港の水がない光景を目撃して、愕然となった。「これは大変な津波が来る」と確信し、大急ぎで自宅に戻る途中で津波に引き倒され、自転車ごと流されたがなんとか助かった。自宅は引き波で潰されてしまった。</p> <p>千葉県旭市では震度5強を観測し、液状化現象、飯岡海岸等での津波被害が発生し、死者14名、行方不明者2名、重軽傷12名のほか、住家全壊336世帯、住家大規模半壊434世帯、住家半壊512世帯、住家一部損壊2,545世帯を記録した。</p> <p>（2）東日本大震災を経験して</p> <p>災害に遭ったとき、72時間はまず家族で頑張る必要がある。その後、市、県、国の公助が入る、というのが実情である。学者が、九州地方では地震の心配はないと言っていた矢先に、熊本県で震災があった。この例からも、日本全国、どこで地震が起こっても全く不思議ではない。</p> <p>地震に限ったことではないが、災害が起こった時には、家族の安否が重要になってくる。いざという時に備えて、所在確認の仕方や、落ち合う場所等の詳細は事前に決めておく必要がある。一方で、近所で一人暮らしをしている高齢者の方</p>

や、自ら動けない弱者の方の対応についても、速やかに行えるように準備しておくことも大切である。

災害直後には、市役所や役場による行政の支援・援助というのは全く期待できない。行政を頼りにせず、地域自治会や住民主導の指揮・命令系統の確立、避難マニュアルの策定などを予め考えておけば、それに伴って動くことができるので、まだ実行に移していないようであれば、早急に構築することを強くお勧めする。

行政の支援・援助については、災害発生から72時間以上経過すると、本格的に被災地域にも届いてくる。それまでは地域での共助で乗り切ることを、避難マニュアルに組み込んでいただきたい。

### (3) まとめとして

本日お越しの自主防災会の皆さんのように、防災に関する高い意識と知識を持つ、地域防災の推進者の方々の声が、災害の現場では決断を促すと言える。また、一番大切なことは、「言葉」だと痛感した。多くの人たちが甚大な被害を受けて避難所生活をしている中で、互いを思いやる「言葉」は本当にありがたいものであり、今でも忘れられない。一言でも良いので声かけをして、お互いに励まし合っていくことが、復興に向けての第一歩につながると強く思う。

また、地域でのコミュニケーションを大切にし、日頃から地域の方々と共存していくことが、災害発生時等の有事には「共助」につながり、非常に有効だと思う。さらには、被害を受けた人たちは、自分の体験を発信していくことが重要だと思う。話を聞いてもらった人には、是非今後の防災活動に繋げてもらいたい。



開催地より

実際に津波の被害を経験された語り部のお話から、その恐ろしさを垣間見ることができた。また、自助・共助の大切さについても理解することができたので、各地域での防災活動に役立てていきたいと思う。